

〔特集…早稲田大学百五十年史〕

## 大学沿革史における「百五十年史」の意義と役割

——『早稲田大学百五十年史 第一巻』を読んでの私的解釈——

瀬戸口 龍 一

はじめに——百五十年を迎えた各大学——

近年、国公立・私立を問わず、幕末から明治一〇年代にかけて創立した高等教育機関において、学校沿革史の一環として「百五十年史」の刊行、もしくは刊行準備が行われている。本稿で取り上げる二〇二二年三月に早稲田大学出版部から刊行された『早稲田大学百五十年史 第一巻』（以後、『百五十年史』と略）もその一つであり、そのほかにも慶應義塾大学、東京学芸大学、立正大学、青山学院大学、立教大学、花園大学などが、通史、資料集、写真集など形態は様々であるが、「百五十年史」を刊行している。

また、二〇二三年一月には、青山学院大学教授の小林和幸氏の編著による『東京10大学の150年史』が筑摩書房から刊行された。「はじめに」によると、同書は「二〇二一年一月に開催された青山学院大学における青山学院史

研究所開設記念シンポジウム「学校史・大学史研究の可能性」を一つのきっかけとして編まれることとなった」とある。<sup>①</sup>筑波大学・東京大学・慶應義塾大学・立教大学・青山学院大学・学習院大学・法政大学・明治大学・早稲田大学・中央大学という、創立一五〇年を迎えた、あるいは間もなく迎える名だたる大学に所属する「近現代史研究者が各校の特徴を記す大学史入門」書であるが、その特徴は単に各大学の「150年史」を簡易に紐解くだけではなく、それぞれの大学の「年史編纂事業」も紹介している点にある。

その理由を「近現代史の研究や年史編纂を進めるなかで見いだされた年史編纂の意義や目的について記述する」<sup>③</sup>ためと記しているが、これは沿革史編纂に際してこれまで各大学がどのような方針や体制で臨んできたのか、そして、これからの「百五十年史」編纂のために何が必要で、そのために何をしようとしているのか、その現状を提示してもらうためとも思われる。評者も大学沿革史の編纂に関わる者の一人として、同書を読んで他大学の状況を知ることができ、今後の参考にしたいと思う考え方がいくつもあった。

大学に限らず、一つの組織が一五〇年も続くというのは、そうそうあることではない。その目的が自校の宣伝であれ、大学アイデンティティーの確立であれ、自己点検であれ、大きな節目を記念して自らの歴史を振り返ろうという機運が持ち上がるのは当然のことであろう。だからこそ各大学で「百五十年史」の編纂が計画され、実行されているわけであるが、ここで問題になるのは、今回、「百五十年史」の編纂を行っている大学の多くが、「百年史」を刊行している点である。しかも各大学とも「百年史」にはかなりの年月、費用、人材を費やし、複数巻にわたる大部な沿革史を世に送り出した。「百年史」の代表例としてよく挙げられる『東京大学百年史』は、全一〇巻（通史三巻、資料三巻、部局史四巻）からなり、一〇年以上をかけて刊行されている。『早稲田大学百年史』（以後、「百年史」と略）も一七八年から九七年と、約二〇年かけて、本編五巻、別巻二巻、総索引・年表一巻の全八巻を刊行している。どちらも

大作であるが、東北大学は全一一巻、東洋大学も全八巻の「百年史」を刊行しており、それほど珍しい例ではない。どの大学も「百年史」編纂には注力していたのである。

このようにすでに「百年史」が存在するなかで、「百五十年史」にどのような意味づけができるのか。その答えは各大学がそれぞれに抱える事情のなかで見出していくべきであり、部外者が口を出す問題ではないが、方向性としては大きく二つに分けることができるだろう。一つは「百年史」とは違う形態での沿革史を編纂する。もう一つは、「百年史」の記載内容を踏襲・深化させ、さらに「百年史」ではあまり描くことができなかった戦後の歴史を充実させる、という二点である。どちらを選ぶかは、今後訪れるさらに大きな節目となる「二百年史」の編纂を見据える場合もあるだろう。

具体例を少し挙げると、早稲田大学に先立ち「百五十年史」の編纂を開始した慶應義塾大学は、前者を選んだ理由として次のように述べている。

慶應義塾では創立100年に際し、全6巻の『慶應義塾百年史』をまとめました。以来さらに50年の年月を重ね、福沢研究センターでは、創立150年記念刊行物として何を編纂すべきかについて、1996年より検討を行なってきました。その結果、年史を執筆するにあたって、基礎となる資料を改めてきちんと整理すべきであるとの結論に達し、来るべき『慶應義塾二百年史』を担う次世代のために、資料集を編纂、刊行することといたしました。

2008年度に、まず別巻として『慶應義塾史事典』を刊行、2010年度には『福沢論吉事典』を刊行する予定です。<sup>3)</sup>

このように慶應義塾大学は、「百五十年史」を通史ではなく、「二百年史」の編纂に役立つよう、資料集の刊行を選んでいる。しかも『慶應義塾150年史資料集』は全部で20巻ほどを20余年の時間をかけて編集していくこ

とになって<sup>(5)</sup>おり、現在、「慶應義塾150年史資料集 第I期」として、二〇一二年度に『塾生・塾員情報集成』、二〇一五年度に『教職員・教育体制資料集成』、二〇二二年度に『諸統計資料集成』の三巻を刊行している。

評者が所属する専修大学も慶應義塾大学と同様、現在、創立一五〇年記念事業の一環として、『専修大学史資料集』の刊行を二〇一三年から行っている。創立一五〇年を迎える二〇二九年に全一〇巻が出揃う予定である。専修大学はこれまで通史や写真集といった大学沿革史は編纂してきたが、資料集は上梓してこなかった。個別大学史研究を近現代史や教育史のなかに位置づけるために、大学が所蔵する資料を公開することで、その責を果たすことを目的としている。近刊としては二〇二三年三月に専修大学出版局より『専修大学史資料集 第五巻 大学昇格への道のり』を発行し、これまで六巻（なお、巻数は刊行順にはなっていない）を刊行してきた。

一方、後者の例としては、立教大学の法人組織である立教学院が、「百五十年史」を編纂するにあたって、早稲田大学と同様に通史という形態を選択している。立教学院は一九七四年に『立教学院百年史』を通史の形で刊行後、『立教学院百二十五年史』として全五巻からなる資料集を刊行、さらには「立教学院と戦争に関する基礎的研究」「立教築地時代の研究」など数多くの研究プロジェクトを実施するなど、長年、自校史研究を進めてきた。そうした約五〇年におよぶ成果を盛り込んだのが、『立教学院百五十年史』というわけである<sup>(6)</sup>。

もちろん早稲田大学も立教大学と同様、『百年史』編纂以降、資料の発掘や研究を進めている。大学沿革史が周年事業に合わせて編纂されることが多いという現状を鑑みれば、今後、各大学に求められるのは、五〇年、一〇〇年、一五〇年という節目の年を考慮せず、絶えず資料の収集・整理・活用をし続けることと言えよう。でなければ、新たな沿革史編纂に価値づけることはできない。その意味で、早稲田大学が『百年史』編纂を主導した大学史編集所を、編纂が完了した翌年の一九九八年に大学史資料センターに改組することで、アーカイブズ化を図り、さらに二〇一八年に

ミュージアム機能を加えた早稲田大学歴史館へと生まれ変わったのは、そうした時代の要請に应运のことと思われる。今回、早稲田大学が刊行した『百五十年史』は、『百年史』の反省を活かすとともに、その後の成果が組み込まれているという。そこで本稿では『百年史』と『百五十年史』の比較という視点から、書評を試みることで、大学、特に私立大学における「百五十年史」編纂の意義と役割を探ってみたい。

## 一、『早稲田大学百五十年史』と『早稲田大学百年史』

それでは、ここから具体的に『百五十年史』を見ていくことにするが、『百五十年史』については、二〇二二年一月二一日の早稲田大学創立記念日に開催された刊行記念講演会において、京都大学文書館の西山伸氏が「『頼りにされる大学沿革史』へー『早稲田大学百五十年史 第一巻』を読んでー」と題した書評講演をすで行っている<sup>①</sup>。本稿でも多いに参考にさせていただいた。そのため論点が重複する箇所もあるが、その点はご容赦いただきたい。

まず、『百五十年史』を手にとった方の最初の感想はおそらく「重い」「分厚い」であろう。図版が八枚、「序」「緒言」「凡例」「目次」が二八頁、本文は一、四〇六頁、そして「索引」「早稲田大学百五十年史 第一巻 年表」「文献・資料一覧」「図版・表一覧」が一八頁と、すべてを合計すると一、五〇〇頁を優に超える大部の書籍となっており、外函の束幅は八五ミリメートルにもおよぶ。ちなみに『百五十年史』の約一年後に刊行された『立教学院百五十年史 第一巻』<sup>②</sup>も一、〇〇〇頁を超えているが、それよりも遙かに頁数が多い。『百年史』は前述の通り全八巻あり、『百五十年史』は全三巻を予定しているので、巻数に大きな違いはあるが、一卷分の頁数としては、『百五十年史』の方が多いため、殊更そう感じるのだろう。

さらに『百五十年史』は早稲田大学出版部を通して販売もされている。価格は二万二、〇〇〇円。近年、大学沿革史を広く社会に向けて販売している大学は少なくない。専修大学も百三十年記念事業の一環として二〇〇九年に編纂した『専修大学の歴史』を平凡社から一、五〇〇円（税別）で、また、『専修大学史資料集』も巻によって価格は違うが、三、九八〇円から四、八〇〇円（税別）の間で販売している。しかし、管見の限り「百年史」や「百五十年史」をこの価格で販売している大学はない。決して一般向けの内容とは言えない一大学（たとえ早稲田大学だとしても）の沿革史を高価で販売する。ジュンク堂や紀伊國屋書店などの大型書店の棚に並んでいるかの確認はできなかったが、その意味では新たな試みと言える。なお、『百五十年史』は、二〇二二年一〇月より始まった「早稲田大学歴史館募金」の寄付者への特典にもなっている。寄付金一〇万円につき、一卷分が贈呈されることで、これもまた新たな試みの一つと言えよう。

次に書評の通例に従い、本章の目次を部・章のみ紹介する。

## 第一部 近代国家像をめぐる相克と「学問の独立」——東京専門学校時代

### 第一章 東京専門学校の創立と建学の理念——一八八一〜八二年——

### 第二章 創立当初の東京専門学校と運営の危機——一八八二〜八六年——

### 第三章 公教育制度の整備と東京専門学校——一八八六〜九三年——

### 第四章 「大学」にいたる東京専門学校の足跡——一八九三〜一九〇二年——

### 第五章 東京専門学校時代の学生の状況——一八八二〜一九〇二年——

## 第二部 「模範国民の造就」とデモクラシーの機運——「早稲田大学」の開校

### 第一章 早稲田大学への発展——一九〇二〜〇七年——

続けて参考のために、『百五十年史』で取り上げた時代に該当する『百年史』の目次も編のみ挙げておく。

- 第二章 早稲田大学とその第二期拡張計画——一九〇七—一三年—
- 第三章 早稲田騒動とその時代——一九一三—一八年—
- 第四章 早稲田大学の学生と校友の諸相——一九〇二—一八年—
- 第三部 「デモクラシー」の転換と戦争への傾斜
- 第一章 大学令の制定と新たな大学への再編——一九一八—二五年—
- 第二章 高田総長体制下の大学——一九二五—三一年—
- 第三章 満州事変後の大学——一九三一—三七年—
- 第四部 戦時体制から敗戦、戦後へ
- 第一章 日中戦争期の早稲田大学——一九三七—四一年—
- 第二章 アジア・太平洋戦争と早稲田大学——一九四一—四七年—
- 第一卷 第一編 序説 東京専門学校創立前史
- 第二編 東京専門学校時代前期
- 第三編 東京専門学校時代後期
- 第二卷 第四編 早稲田大学開校
- 第五編 「早稲田騒動」
- 第三卷 第六編 大学令下の早稲田大学
- 第七編 戦争と学苑

目次から確認できる『百五十年史』と『百年史』の違いは何か。二つの目次を見ればわかるように『百五十年史』が取り扱う年代は、『百年史』で四巻にわたってすでに詳細に描かれている年代でもある。そして当然のことながら分量的にも『百年史』の方が多い。編纂専門委員で第一巻の執筆者の一人である湯川次義氏もこの点について『百五十年史』は『百年史』の「要約的なものにならざるを得ないと考えています」と刊行前から述べている。紙幅の関係上、『百五十年史』は部と章のみ、『百年史』は編の項目しか紹介していないが、詳細に目次を見比べてみてもその言葉に間違いはない。

なお、この目次で使用されている文言については、すでに西山氏が「百年史各編のタイトルが比較的オーソドックスな制度史的時期区分をそのまま示しているのに比べると、本書の各部には編者の歴史観・時代観を表すようなタイトルが付されている」と言及しているが、少し付け加えておく。確かに『百年史』は編のタイトルこそオーソドックスであるが、章やその下の漢数字のみで付された節のタイトルには、叙情的な文言や煽動的な文言を散見することができる。例えば、『百年史』第二巻に収録されている「第五編 「早稲田騒動」で使用されている「革命にあこがれた早稲田学生」や「早稲田ロマンティズムの終焉」「独走する商科」といった見出しがそうである。その点、西山氏が言うように『百五十年史』には、タイトルに「歴史観・時代観」を見ることができるが、これは『百年史』が持つ顕彰的な側面をできるだけ取り除き、早稲田大学の歴史を研究史上に位置づけようとする姿勢とも読み取ることができる。その意味で、目次からだけでも、『百五十年史』は『百年史』とは違う方針を立てて編纂されていることがわかるのである。



## 二、『百五十年史』に見る創立者および地域に関する記述法

ここからは『百五十年史』の内容に入っていくが各章・各節の内容を一つ一つ取り上げることはできないので、評者が気になった点のみについて記すこととする。早稲田大学は『百年史』刊行以降、新資料の収集、「記要」発行の継続、さらには二〇〇四年一〇月からは創立一二五周年記念事業の一環として創立者である大隈重信の書簡や文書を翻刻した『大隈重信関係文書』（全二巻）の刊行も行っている（二〇一五年に刊行終了）。また、『百年史』編纂に深く関わった佐藤能丸氏は、『百年史』の一卷には「『小野梓全集』の編集とその成果が生かされていない」と指摘しているが、当時、刊行を終えていなかった『小野梓全集』（早稲田大学出版部）も一九八二年に全六巻が出揃っている。つまり、『百年史』編纂当時よりも研究が進んでいる状況であることは間違いなく、だからこそ『百五十年史』を新たな通史として編纂することに踏み切ったと思われるが、最初にその点について見てみたい。

『百五十年史』の執筆者の一人であり、『百年史』刊行後、早稲田大学史研究を深く進めてきた真辺将之氏は『百年史』の内容について「大学の歴史としては、日本の各大学史のなかでもトップレベルの浩瀚さで、大学の制度・機構の変遷から学生生活まで、実に重厚な記述がなされて」と評価している。その一方で、「東京専門学校の学生たちの活動や気風、進路などについては、資料状況などの制約もあって、さほど多くの頁が割かれているわけではない」と課題を挙げている。<sup>12)</sup> その課題の克服の一つとして真辺氏が書き上げたのが、二〇一〇年に、早稲田大学出版部から刊行された『東京専門学校の研究——学問の独立』の具体相と「早稲田憲法草案」であるが、当然、この書籍の成果も『百五十年史』に活かされている。

同書には、真辺氏が発見したという東京専門学校生徒有志が作成した私擬憲法草案に関する論考が収録されている。その論考をもとにして書かれたのが、『百五十年史』の第二章第四節の「東京専門学校の有志による活動」のなかに設けられた「私擬憲法草案」という項目である。まさに『百年史』では描かれなかった新たな早稲田大学の生徒像の提示であり、『百五十年史』編纂の一つの意義と言えよう。

このような新たな知見の加味も『百五十年史』の意義を考えるうえで重要なことであるが、評者がもつとも関心を引かれたのは『百五十年史』の編集後記に記された「百五十年史の構成」の概要である（一四〇三―一四〇四頁）。

・編纂準備委員会報告を踏まえた二〇一〇年度第一回編纂委員会の確認にもとづき、全三巻構成を基本とする。

・巻別構成は編纂準備委員会報告案をベースとし、各巻の区分は、大学の制度的な転換を指標として行なうものとする。およその内容区分は、以下の通り。

第一巻：創立～戦前期（大学令下の早稲田大学まで）

第二巻：戦後～一九九〇年頃（創立百周年事業まで）

第三巻：一九九〇年頃以降

・大隈重信個人にかかわる詳しい叙述は『百年史』に譲り、東京専門学校創立期の叙述を充実させて、創立経過と建学理念の明確化をはかる。

・別巻は想定せず、部局・箇所については本編のなかで扱う。

・出版状況の推移を見定め、紙媒体とは別の新たな形態（媒体）による刊行にも対応できる準備を重ねる。

この構想のなかで注目すべきは、創立者の扱いである。これまで、私立大学が編纂した沿革史、特に周年記念誌に

おいては、創立前史と銘打って創立者に多くの頁を割いてきた。確かに大要にあるように早稲田大学は『百年史』の第一巻において、「第一編 序説 東京専門学校創立前史」として、創立者である大隈重信の生涯の前半生を詳細に描いているが、『百五十年史』では、この大要に従い、学校創立の背景から叙述を始めている。もともと早稲田大学の歴史に詳しい方や、歴史学や教育学の研究者は別として、世間的には大隈という大きな存在の影に隠れがちな小野梓や高田早苗のような実際に開学に尽力した人物たちにスポットを当て、開学期の早稲田大学の実像を描くというその手法によって、『百年史』との違いを明確に打ち出そうとしたこの叙述方針は、同じ私立大学の沿革史編纂に関わる評者として驚嘆に値する。

早稲田大学と大隈家の関係については、佐藤能丸氏が、往時を振り返った座談会で、「大隈家が大学を法人として代表したことは一回もないです。これが他の私立と全然違うところです。高田早苗さんをはじめとする大学の執行部が、それだけ世襲的な支配を退けたということです。」と、大隈家と早稲田大学の関係性について言及している。また座談会では同じく『百年史』に関わった川口浩氏も早稲田大学の建学の精神の一つ「学問の独立」の意味のなかには、「大隈家からの独立」も含まれているという正田健一郎氏の意見も紹介している。<sup>(13)</sup> 早稲田大学が自身の歴史を客観的に振り返る際、大隈重信という明治・大正期を代表する政治家の存在をどのように取り扱うかはこれまでも大きな問題であったことがここからもわかる。『百五十年史』編纂を機に、純粋に大学の歴史に向き合った沿革史編纂への姿勢は高く評価されるべきであろう。

そのほかにも『百年史』では創立前史以外にも大隈に関する事項を「大隈重信の総長就任」「大隈銅像と早稲田校歌」「風雲の第二次大隈内閣出現」(すべて第二巻)のように章の見出しに使っているが、『百五十年史』では一切使用していない。さすがに大隈の死去については取り上げているが、それでも『百年史』のように「巨星墜つ」(第三巻

第三章」というような顕彰的な扱いはせず、大隈家による邸宅の大学への寄贈や、記念事業、教職員・校友などによる募金活動についての記述に留めている。

創立者の扱いについて他大学の『百五十年史』編纂の事例を見てみると、慶應義塾大学は「慶應義塾一五〇年史資料集 別巻2」として『福沢諭吉事典』（慶應義塾 二〇一〇年二月）を刊行し、パンフレットでは「現代の課題に通じる多くの知見に溢れた、画期的な個人事典です。」（傍点は筆者）と謳っている。立教大学も「百五十年史」において冒頭の第一編に「創立者ウィリアムズと立教学校 一八七四―一九〇七年」と題して、ウィリアムズの生い立ちや活動を紹介している。両校の創立者に対する姿勢および叙述方法の方が私立大学としては、当然のことと受け止める関係者が多いだろう。その意味で、『百五十年史』は、初めて自身の大学の歴史に真正面から向き合った私立大学の沿革史と言えるかも知れない。ただし、今後、各大学で編纂する沿革史のなかでこの方針を採用するかどうかは不明である。特に創立者が今なお何らかの形でその学校に関わっている私立大学ならなおさらである。しかし、私立大学の沿革史を歴史学や教育学のなかで位置づけていくためには、大学の歴史と創立者の存在を分けて考えていく必要があるのではないかと『百五十年史』は改めて考えさせてくれた。

もう一点、『百五十年史』では、大学と地域との関係性をどのように描いているのかについても触れておきたい。二〇一九年二月四日に開催された第五回早稲田大学大学史セミナーで講演を行った荻野富士夫氏は、自身が編纂に深く関わった『小樽商科大学百年史』の基本方針として、「四つの「史」」を掲げている。すなわち「教育史」「学術研究史」「学生生活史」「地域社会史」の四つであるが、近年の個別大学沿革史の多くが同様の方針を打ち出している。その意味で、近年の大学（高等教育機関）沿革史の特徴としては、①大学の歴史を近現代史（政治・経済・社会）研究のなかに位置づける、②独りよがりにならないよう他大学との比較を行う、③学生・卒業生の動向に目を向ける、

そして、④大学と地域との関係性を問う、という四点を挙げることができるだろう。

『百五十年史』が以上の四点を踏まえ、充実した内容になっていることは間違いない。西山氏が評しているように「早稲田騒動」や「戦時期」に関する記述も時代背景や研究史を踏まえた内容になっており、少なくとも『百年史』との違いを打ち出そうとする意図は明確に読み取ることができる<sup>(15)</sup>。

地域に関する記述に話を戻すと、早稲田大学は『百年史』においてもすでに学生街としての早稲田周辺地域に関して詳細に記述している。『百五十年史』における記述も、西山氏は「百年史以来のよき伝統を引き継ぐ学生文化やキャンパス周囲の町の発展についての描写」と評価している通りである。事実、『百年史』と『百五十年史』ではその記述にはほとんど変化が見られない。「下宿屋と商店街」と題した項目の冒頭の「本学の学生にもっとも結び付きが深い町は、周辺の早稲田鶴巻町であり戸塚町であった」（九六八頁）というくだりも『百年史』の「第六編 大学令下の早稲田大学」第十章 変貌する「都の西北」<sup>(16)</sup>「二 早稲田界隈素描」の冒頭の文言をほぼ流用したもので、内容全体も『百年史』の要約となっている。

もちろん、新たに編纂される沿革史のすべての内容に新知見を入れることができる筈もない。これまで編纂してきた沿革史をそのまま踏襲せざるを得ない箇所が多いのも当然のことである。しかし、大学と地域の関係性を問う際、早稲田大学関係者の記憶や記録や刊行物からの記述に頼るのではなく、一次資料にあたることも必要であろう。例えば、「下宿屋と商店街」では、一九二九年に刊行された「考現学」の第一人者で早稲田大学の教授を務めた今和次郎の編著『新版大東京案内』（中央公論社）の記述を引用して、当時の都内で下宿屋がまとまって存在した地域は本郷と早稲田のみと記している（九六九頁）。ちなみに今氏の記述を引用して早稲田学生街の一端を描くという手法は『百年史』（第三巻 第六編 第十章）「変貌する「都の西北」」も同様である。

実は、この記述内容は、二次資料ではなく、一次資料から確認することが可能である。警視庁が毎年、刊行している統計書がある。この統計書には東京府内の下宿屋の総数、宿泊人数が記載されている。大正一五年一二月に警視庁総監官房文書課が発行した大正一四年分の『警視庁統計書』を見ると、下宿屋の数がもつとも多いのは市部では本郷区本富士が一五一軒、次いで牛込区早稲田が一四軒である。さらに郡部にも目を向けると、豊多摩郡戸塚にも一三九軒の下宿屋があった。このように早稲田界隈の下宿屋数が飛び抜けていたことを当該期の統計書から確認することができる。

「学生街」は学生の生活を支える、非常に重要な空間である。前述した荻野氏だけでなく、佐藤能丸氏が提唱する「大学文化史学」においても考察の対象の一つとして、「大学周辺（環境地域）史」を挙げている。<sup>①</sup>『百年史』は同時期に刊行された他大学の「百年史」とは比べものにならないほど、学生と地域の関係性について深く言及している。だからこそ可能であるならばこの点についての研究の深化にも期待したい。

### 三、大学沿革史における編纂体制

最後に編纂体制についても触れておく。というのも、大学沿革史の編纂は一人ではできものではなく、まずは編纂体制をつくりあげることから始まるからである。特に「百五十年史」ともなれば、周年事業の一環として、法人・教学が一体となって推進される場合が多い。早稲田大学における「百五十年史」編纂体制を見ていくことは、今後、「百五十年史」編纂に取り組む他大学にとっても大きな参考となるに違いない。

前述した真辺氏は早稲田大学における『百五十年史』編纂体制の課題を、「専任の研究者がおらず、任期付きの若

手の助手・助教・非常勤嘱託、そしてアルバイトの方々によって業務を行っている状況がありまして、（中略）、編纂における最大の障害になっているという問題がございます。」<sup>(18)</sup>と挙げている。この発言は刊行に先立つ六年前のことである。

この真辺氏が指摘した課題は、沿革史編纂を行っている、または行おうとしている大学すべてが抱える問題である。編纂の責任は誰が負うのか、執筆は誰が行うのか、資料の調査や整理などは誰が何人で担当するのか、編纂に關する事務的な作業はどうするのか、経費の管理はどの部署が担当するのか、このように沿革史編纂にはいくつもの担当業務が発生する。

早稲田大学の『百五十年史』では、上部組織として理事や各学術院から選出された教職員などからなる「早稲田大学百五十年史編纂委員会」を設置し、その下に実際の編纂方針などを協議する「早稲田大学百五十年史編纂専門委員会」が、さらに執筆担当者が集まる「編集会議」を設けている。この三つの会議体によって編纂体制は構成されており、その構成員はすべて専任の教職員である。そして実務を担うのが任期付の講師、助手・助教、非常勤嘱託によって構成された事務局で、彼ら彼女らが編集の手伝い、校閲などを行うという。<sup>(19)</sup>真辺氏の指摘の通り、『百五十年史』の編纂に従事する専任の研究者がいないという状況で『百五十年史』の第一巻は編纂・刊行されたのである。この点については、江永博氏も「当時第一・二部、第三・四部の構成を考案した執筆者は、任期の制限等によって、最後まで担当することができず、担当嘱託が途中交代せざるを得なかった。このように、専属的な執筆者の継続性は大きな課題である。」<sup>(20)</sup>と述べている。

私立大学のアーカイブズ組織で、現状、専任教員を置いているのは、寡聞にして慶應義塾大学しか知らない。真辺氏もこの点については繰り返し課題として挙げており、『百五十年史』の編纂体制について、「慶應義塾福澤研究セン

ターが二名の専任教員を置いていることと比べるならば、見劣りすることは否めない。<sup>(2)</sup>と指摘している。また、執筆についても、現状、学内の各学部に所属する専任教員が担当しているが、多忙を極めるなかでの執筆にも関わらず、担当コマ数の軽減などがされることもなく、かなりの負担になっている点も問題点として挙げている。

こうした点については、数多くの大学沿革史編纂に関わってきた寺崎昌男氏も沿革史編纂が、「あだおろそかに」にされている理由として「やっても得にならない仕事」であるからと述べている。<sup>(2)</sup>つまり、沿革史編纂や執筆が自身の研究上の延長にあるならば、もしくは深く繋がっているならばともかく、「順番や義理」で執筆せざるを得ない場合が多いというわけである。確かにそういった例は多いと思われる。

このように編纂に携わる専任教員も問題を抱えているが、執筆を下支えする職務を担う人々はもっと深刻な状況に置かれている。実際に『百年史』編纂に携わった佐藤能丸氏は、「材料を集めたのは助手役です。膨大な材料をつかって先生方が執筆なさる。おそらく自前の資料でお書きになったのは木村毅先生だけです。」<sup>(2)</sup>と述べているように、沿革史編纂には、執筆者以外に多くの人間が関わっており、その業務は多岐にわたる。本務で多忙な執筆者に代わって種々の業務に従事する事務局内で雇用された人々の存在なしには編纂は進まない。しかし、彼女らのほとんどは二年、三年、五年といった任期制での雇用であり、ポストの問題もあるので、そこから正規の教職員へと採用されることもあまりない。

『百五十年史』の「編集後記」を読むと、助教、助手、常勤嘱託すべてが任期付であり、事務長のみが専任となっている。その事務長も歴代人数が五人となっているので、単純に割ると在任期間は二年もない。実際に編集の基礎となる調査や資料収集を担当した方々の名前も多数挙げられており、このことはいかに多くの担当者への入れ替わりがあったかを示している。「継続性」が問題となるのもむべなるかなである。こうした状況に対して引き継ぎをきちん



と行うことで改善を目指すのではなく、長期間にわたって行われる沿革史編纂においては、せめて、編纂が終わるまでの雇用を担保することが必要ではないかと思われる。

もちろん任期付の人材雇用というデリケートな問題に頭を悩ませているのは早稲田大学に限った話ではない。また、この問題については、予算にも関わっているのも、この間、『百五十年史』編纂に関わっている方々のなかでは繰り返し議論されてきたことも『早稲田大学史記要』などに記されている。しかし、早稲田大学や慶應義塾大学などの著名な大学で行われる沿革史編纂のあり方が、多くの大学に与える影響は大きい。同じ私立大学のアーカイブズ、そして沿革史編纂に関わる身でありながら、他力本願で非常に情けない話ではあるが、大学史研究のさらなる発展のためには重要な問題と考え、指摘させていただいた。

### おわりに―大学沿革史の編纂目的とはなにか―

今回取り上げた『百五十年史』は今後も第二巻、第三巻と編纂・刊行が続いていく。その評価や位置づけはこれからであり、この書評も第一巻のみを読んだ評者の私的かつ大卒な感想でしかない。前述したように特に細部の内容に踏み込むことができなかったのも、紙幅の関係上とはいえ、評者の力量不足であり、不十分な内容である点はお許しを乞うとともに、最後に大学沿革史の意義について改めて述べ、本稿を終えたいと思う。

大学沿革史は誰を対象にして、どのような内容（テーマの選択や叙述レベルなどを含めて）にすれば良いのか。専修大学の沿革史に関わる評者にとっても非常に大きな課題である。編纂の目的については、近年では寺崎昌男氏による「自己点検・評価」のための沿革史編纂という提唱が浸透してきているように思われる（少なくとも沿革史編纂に関わる

大学関係者のなかではであるが<sup>(24)</sup>が、どのような目的・形態にしたとしても、全ての人に満足してもらえないような大学沿革史をつくることはできない。それは沿革史編纂に携わる者として常に念頭に置いておかねばならない問題である。どんな理由づけをしても、外部からだけでなく、内部からも、「そもそも必要なのか」という意見が絶えないことも事実だからである。

その意味で『百五十年史』はどのような読者を想定して編纂したのだろうか。西山氏は書評講演のなかで「ぜひ読者の味読をお勧めする」<sup>(25)</sup>と述べているが、研究者ならともかく、一般の読者（在学生・卒業生も含めて）でこの分量を「味読」や「熟読」できる人はそういないだろう。それでも『百五十年史』をこのような形で編纂しようとした理由として真辺氏は「質の問題」を挙げ、次のように述べている。

要するに、多くの人が読むということは、面白く、そして手軽なものということになってしまっただけですけれども、大学史が必要なのは、必ずしもそうしたすぐ読む、たくさん読んでもらうためというだけではなくて、記録を残しておく、あるいは整理しておくということに大きな意味があるわけです<sup>(26)</sup>。

早稲田大学の歴史を未来に繋げていく。これが『百五十年史』の目的である。そのために、あえて手軽な読み物にせず、質の高い記録にしたというわけである。沿革史編纂に関わる者として賛意を表する次第である。そしてこの編纂方針を法人や教学当局に納得させることがいかに大変だったであろうことも容易に想像できる。比較的、財務に余裕のあった『百年史』編纂時代と『百五十年史』編纂の現在とは、大学史そのものに対する捉え方も大きく違っていると思われるからである。

大部の通史と資料集。大学沿革史編纂物としてどちらを選択しても一般向けでないことは明らかであるが、大学の

歴史を未来に伝えていくためにどちらも重要な仕事である。予算が付きにくい大学沿革史の編纂であるが、「百年」「百五十年」「二百年」といった大きな節目につくられる周年記念誌という位置づけであれば、ある程度の予算を付けてもらいやすいのも事実である。であるならば、「百五十年」を機に早稲田大学が大部の通史を、または慶應義塾大学が全三〇巻にわたる資料集を編纂することは、他大学にとっても大きな刺激となり、今後の大学史研究の発展に繋がっていくことと思われる。このような大部の沿革史の編纂は、内部における資料収集の重要性を高め、さらなる研究を進めていくことで新たな大学史研究者を育てるきっかけの一つにもなるだろう。

しかし、『百五十年史』に関して言えば、第一巻は戦前までの歴史を取り扱っているため、新たな知見が加わっているものの、基本的にはこれまで編纂してきた沿革史の内容を踏襲することができた。続く第二巻、第三巻こそ、その真価が問われることになる。すでにその方向性は打ち出されているが、多くの大学史関係者同様、評者もその内容に注目するとともに期待している。

せとぐち・りゅういち（専修大学大学史資料室室長）

## 註

- (1) 小林和幸編著『筑摩選書24』東京10大学の150年史(筑摩書房 二〇一三年一月)一四頁
- (2) 小林「前掲書」の帯に書かれたキャッチコピーから抜粋
- (3) 小林「前掲書」一一～一二頁
- (4) <http://www.fmc.keio.ac.jp/research/150project.html>
- (5) 清家篤「刊行の辞」(慶応義塾150年史資料集1 基礎資料編・塾員塾生資料集成) 慶応義塾 二〇一二年一月
- (6) 老川慶喜「立教史研究」の到達点」(『立教学院百五十年史 第一巻』立教大学立教学院史資料センター 二〇一三年二月) v～vi頁
- (7) 西山伸「講演会記録」(頼りにされる大学沿革史)へ『早稲田大学百五十年史 第一巻』を読んで」(『早稲田大学史記要 第五四巻』早稲田大学歴史館 二〇一三年三月)
- (8) 立教学院百五十年史編纂委員会編『立教学院百五十年史 第一巻』(立教大学立教学院史資料センター 二〇一三年二月)。こちらも『早稲田大学百五十年史』と同様、全三巻を予定している。
- (9) 湯川次義「『早稲田大学百五十年史』の概要とそこに求められるもの」(『早稲田大学史記要 第五〇号』早稲田大学大学史資料センター 二〇一九年二月) 一七二頁
- (10) 西山「前掲論文」一五八頁
- (11) 「座談会『百年史』から『百五十年史』へ」(『早稲田大学史記要 第四三号』早稲田大学史資料センター 二〇一二年二月) 九三頁
- (12) 真辺将之「東京専門学校の研究——学問の独立」の具体相と「早稲田憲法草案」(早稲田大学出版部 二〇一〇年一月) 二～三頁
- (13) 「座談会『百年史』から『百五十年史』へ」九五～九六頁
- (14) 荻野富士夫「大学史に学生は入っているか——『小樽商科大学百年史』の経験から——」(『早稲田大学史記要 第五二号』早稲田大学大学史資料センター 二〇一一年三月) 一二八～一二九頁
- (15) 西山「前掲論文」一六二～一六三頁
- (16) 西山「前掲論文」一六五頁
- (17) 佐藤能丸『大学文化史——理念・学生・街——』(芙蓉書房出版 二〇一三年四月) 二〇頁
- (18) 真辺将之「早稲田大学における編纂事業のこれまでとこれから——『早稲田大学百五十年史』にむけて——」(『早稲田大学史記要 第四七号』早稲田大学大学史資料センター 二〇一六年二月) 二二六～二二七頁
- (19) 小林「前掲書」二四〇頁
- (20) 江永博「『早稲田大学百五十年史』編纂実務の経過と課題」(『早稲田大学史記要 第五四巻』早稲田大学歴史館 二〇一三年三月) 一〇九頁
- (21) 小林「前掲書」二四二頁
- (22) 寺崎昌男「よりよき『百五十年史』のために」(『早稲田

大学史記要 第五〇号』早稲田大学大学史資料センター

二〇一九年二月）二一五～二一六頁

(23) 「座談会「百年史」から「百五十年史」へ」九二頁

(24) 寺崎昌男氏には多くの著作があり、この主張の典拠をすべて挙げることはできないが、『大学自らの総合力Ⅱ―大学再生への構想力』（東信堂 二〇一五年一月）を挙げておく。

(25) 西山「前掲論文」一六五頁

(26) 真辺将之「早稲田大学における編纂事業のこれまでとこれから―『早稲田大学百五十年史』にむけて―」二五六頁

(27) 真辺将之「『早稲田大学百五十年史』第二巻の方向性について」(『早稲田大学史記要 第五四巻』早稲田大学歴史館 二〇二三年三月)